

随筆を書く

野瀬 隆平

「春が来た」

散歩していると桜のつぼみが膨らみ始めたのが目にとまった。散歩道には、桜のつぼみを楽しむ人たちが賑わっている。

子どもたちが手をつないで駆け回り、若いカップルが仲良く話し合っている。老夫婦も、優しく手を繋いで、一緒に春の訪れを感じている。私もその中に加わり、桜のつぼみを見つめながら、深呼吸をする。

新しい季節が始まるという感覚は、何とも言えない喜びと興奮を与えてくれる。春の訪れは、新しい始まりの象徴でもある。そして、ついに桜のつぼみが一つ、一つと開花を始めた。淡いピンク色の花びらが、風に揺られながら舞い散る様子は、まるで優雅なダンスのようだ。

私もまた、その美しさに魅了され、心から春を感じるのであった。

この文章、実は自分が書いたものではない。そもそも、こんな光景に接していない。最近、注目を浴びているチャットGPTというAIが創り出したものである。

このソフト、例えば「糖尿病を治すにはどうすれば」と問えば、たちどころに数十行の答えが打ち出される。しかし、このソフトが無くても、「糖尿病」で検索して得られるいくつかの知見をまとめれば、それなりの答えは得られる。

けれども、随筆の作成は次元の異なるものだ。「春」や「桜のつぼみ」で検索して何らかの知識が得られたとしても、文章に仕上げるといふ別の作業が必要となってくるからである。

かような文例を参考にすれば、ゼロから文章を書くより楽であろう。けれどもカンニングしたような後ろめたさが残るし、何よりも考えながら文章を紡ぎだす楽しみを奪われてしまうので、使う積りはない。

ところで、このソフトに作文させるには、具体的にどうしたらよいのか。先ず、「春が来た」とテーマを与え、書き出しの一文だけを自分で作って、「この文章を続けて書いてください」と指示すると、「散歩道には……」以下が打ち出されてくる。

この方法は誰に訊いたのか。チャットGPT自身が教えてくれたのだ。

注：GPT = Generative Pre-trained Transformer